

人形淨瑠璃と泉州堺

私は泉州堺の生れである。足利末に榮えた泉州堺の津は、古い日本の文化の淵源である。この土地から海外の文化が流れ込んだのだ。日本の近世文明の蛹は、この堺の津に育ぐくまれてゐたのである。今日見る堺の町は、物靜かな落ついた町——古い匂のする幽かしい町であるが、足利末に榮えた頃の堺の津は全く、當時の日本國中隨一のハイカラな町であつたらう。

この堺の津は、海外貿易の唯一の關門であつた。されば鐵砲はこの堺の津から輸入された。「櫻之町が近いとてボン／＼鐵砲を放なすまいぞ」——と淨瑠璃「お夏清十郎連理松」湊町の段にいつてゐるが「難波丸綱目」を繰擴げるまでもなく、私どもの子供の頃までは、井上といふ鐵砲鍛冶の職場が、堺市の北寄りである櫻之町の中濱の西側にあつたものだ。

堺の津から殺伐な鐵砲といふ武器が輸入されて、日本の武器に一大革命を起したとともに、この堺の津へは三味線といふ風雅な器物が輸入されてゐる。

私のこゝに述べようといふのは、この三味線の輸入から話が初まるのであるが、實は大正十五年末に

堺市教育會の主催である市民講座の科外趣味講座で、私は「淨るりと堺市との關係」といふ題のもとにほんのつまらぬ講演を試みた。この市民講座でお喋りをした心覚えの稿本を、更に綴つて茲に印刷に附することとする。

私は小唄の祖である堺に産れた隆達節について、詳しいことを知りたかつたので、私の能ふ限りを盡したが、隆達については得るところは餘りに貧弱であつた。然しこの隆達とほゞ時代を同じうして、永祿年間に三味線の原形が堺の津に輸入された。この三味線渡來を永祿とし文祿年間とする二説があるがどうも永祿年間に琉球から渡來したのが、眞事實であるらしい。が、ふしぎに隆達節とは關係がなかつた。即ち隆達はどこまでも扇拍子であつて、即興の唄であつて、三味線に合はしたものではなかつた。

ところで、「淨るり」の權輿はいつ頃ぞやといふと、例の「宗長日記」に既に見えてある如く、享祿四年に、宇津山邊の旅の宿りに、小座頭が淨るりを語つてゐる。そして「淨瑠璃」とは、牛若と淨るり姫との情事を物語りにした「語りもの」の一種である。

この淨瑠璃姫物語即ち十二段草子が、淨るりといふ名の始めであつて、少くとも享祿四年から永祿に互つて扇拍子で語られてゐたと思はれるが、永祿年間に、琉球から堺の津に渡來したのである。この胡弓を奏することがむつかしかつたので、平家の琵琶師が、その撥を以て弾き初めた。これが三味線の根

元である。

ところで、琵琶の撥を以て弾き初めたのは、琵琶法師の手によつてなされた、そして三味線が弾けるやうになると、これが扇拍子に代つて淨るりをこの新しい樂器の絃に合はして語り出すやうになつたのである。この琵琶法師こそ、堺の産で慶長頃の盲人で、その道の高手と唄はれた澤住檢校であつた。

この澤住檢校の門下に、目貫屋長三郎といふものがあつて、攝州西宮の傀儡子引田なにがしを語りひて、淨るりに合はせて人形を操つることを初めた。これが全く今日いふところの人形芝居の權輿であつた。そしてこの目貫屋長三郎は、京の人であるが、堺に移り住んで居た。斯くの如く永祿年間に渡來した三味線が、澤住檢校及び目貫屋長三郎の手を経て淨るりに合はせるやうになつたのは、慶長年間である。ところで、泉州堺の人で、水無瀬流の琵琶を岩橋檢校に學んだ虎屋治郎右衛門が、澤住檢校に曲節を學び、薩摩太夫となり、薩摩淨雲となつた。これが寛水の初年に江戸に下つて、江戸淨るりの開祖となつた。

この薩摩の弟子の一人である源太夫が、京都に上つて京都に淨るりの根を下ろした。これと前後して京の人で井上播磨掾が源太夫の門に入つて、一流を始めた。これが寛文の頃より流行し浪花の地に入つたのであるが、後の竹本、豊竹ともに、この播磨の系統を引いてゐる。かくて山本角太夫土佐、宇治嘉

太夫加賀などを経て、天王寺の五郎兵衛即ち竹本義太夫を生むに至つたのであるが、私の目的は淨るりの歴史を説かうとするのではない、竹本義太夫といふ人形淨るり大成者を生むに至るまでの徑路が明かならばいゝのだ。

即ち澤住檢校、薩摩淨雲といふ堺の津の人々によつて、堺の津に渡來した三味線が淨瑠璃姫物語と結合して、今日の淨るりの基礎を作つた。故に人形淨るりは堺の土地から發祥し、堺の土が産んだ一大藝術であつたのだ。

堺の土が産んだ淨るりは、不思議な因縁で、更に近世に入つて、堺の人士の手で、今日に傳へ、且つ榮え來つたといへるのである。今日何人も近世の——近い時代の名人といへば、攝津大掾を推すことは間違ひがないが、この攝津は大阪の産ではあるが、春太夫系の人である。そして春太夫系は殆んど堺の出身なのである。

初代春太夫は、竹本大和掾の門弟で、泉州堺の産、延享元年から天明四年まで榮えた名人であつた。春太夫の二代目は初代の又弟子であつたが、凡庸の材であつた。三代目は岡太夫の門人でこれも凡々。四代目の春太夫が堺の人で榊屋又兵衛といつて、三代目の門人であつて、四代を繼いだが、多病であつたので、堺戎の町西六間筋へ隱退した。この四代目の養子となつたのが、竹本氏太夫の門弟で文字太夫

といった男、これが五代目春太夫となり、春太夫系中興の祖である。この五代春太夫が泉州堺鍛冶屋町の産であるが、一日出羽庄内の城主酒井左衛門尉の江戸邸へ招かれて「山科」を語つたが、淨るりを語つてゐるうちは寸分の間がなく、魂が全身に籠つてゐたと、左衛門尉から激賞された名譽の逸話が残つてゐる。

五代春太夫の三味線が野澤吉兵衛であつて、この兩人が攝津大掾を仕込んだのである。攝津の淨るりは勿論天性の美音の助くるところでもあつたらうが、春太夫吉兵衛に負ふところも多大であつた。そして大掾の衣鉢を繼いだものが三代目竹本越路太夫であつて、これ亦、堺の産である。

かう數へて來ると、今日文樂座を拵へ上げた春太夫系の殆んどが——初代春太夫、四代春太夫、五代春太夫、越路太夫と——堺の産である。これをしも因縁淺からずといへようか。この意味において三味線渡來の抑もから文樂座の紋下竹本越路太夫に至るまで、堺の土が生んだ「人形淨るり」といふもあへて不思議ではない。或は又僭稱でもない。全く人形淨るりは、多く堺人士の手になつた郷土藝術でないと誰がいへようか。

日本音曲の司である淨るりが、堺の土地に因縁の淺からざることを、堺の人士がハツキリと知つてゐるのだらうか。私はこの意味からいつて、近世文化の大事業をなしたこの立派な郷土藝術の大成者であ

る初代春太夫から三代越路太夫に至る人形淨るり界の「近世」の事蹟をもつとく、闡明にしたいと思ふ。この「近世」の時代こそ、最も文献に乏しく研究に資する材料を缺いてゐるので、せめても古老の生存中に材料の蒐集に努めたいと心掛けてゐるわけである。(昭和二年二月)